英語活動

乗富章子　山岸朋子　笹山明夫
齊官重治　古川雄次　横山明子
山本瑞穂　安田一志

1　これまでの取り組み

本校が英語活動に取り組んで7年になる。その間、英語活動を総合学習の中に位置付けていたが、活動の中心は英会話であり、国際交流や国際理解にかかわる調べ活動とは一線を画していた。それは英語活動の目標を「コミュニケーション能力の育成」と定め、そのカリキュラムを早期から作成して実践にあたっていたからである。私達がとらえる「コミュニケーション能力」とは、互いに素直に自分の意志を伝えようとして、言葉などの手段で表現し合う能力という意味である。

一昨年度は、それ以前には年間10時間だった活動の時間を20時間に増やし、「コミュニケーション能力の充実」を目標にして取り組んだ。HT (Homeroom Teacher) とALTのTTで指導する時間と、HTが中心となって指導する時間を組み合わせた。活動の形態としてHTとALTのTTだけでなく、学年合同やビデオの利用など様々な試みを行うことができた。しかしnative speakerの英語に直に触れる時間をより多く確保することが大切ではないかとの反省が残った。

そこで昨年度は、ALTを4人に増やして、20時間のすべてをHTとALTのTTで指導するように計画した。そして活動の目標を「コミュニケーション能力の向上」として、ALTがさらに積極的に活動を進めていくようにした。子どもが英語に直に触れる機会をより多く持つことによって、私達が願うコミュニケーション能力は、向上しつつあるように思えた。子どもは、ALTとの英語活動を喜んで受け入れ、英語の時間を楽しみに待つようになっていた。その一方で、ALTの個性を生かしたTTの仕方が難しく役割の分担や扱う英語自体の順序性などが課題として取り上げられるようになった。

2　今年度の英語活動

(1)　指導体制について

今年度は英語活動の時間をさらに増やして年間30時間とした。ほぼ1週間に1時間である。そしてALTも5人に増員した。昨年度に引き続き、原則としてすべての英語活動の時間がHTとALTのTTで行われている。活動内容についての打ち合わせは、前の週に行っている。TTについては、できるだけ具体的にHTとALTの役割の分担を決めることにしている。例えばゲームの説明は、まずALTが英語で行うが、HTは子どもの反応を見て必要と判断した時にだけ日本語で補足の説明をする。また会話の場面では、HTとALTがどのようにデモンストレーションをするかを打ち合わせで明確にしておくなどである。

さらに、ALTはできるだけ日本語を使わないように、HTはできるだけ通訳をしないように心がけている。それは、子どもが英語に直に触れる機会を最大限に保障したいと考えるからである。

そのために、私達は年間指導計画に、より具体的な活動やそれを行う順序、使う教材や教具を明記した。英語活動を指導するのは本校のすべての学級担任である。英語の得意な者ばかりではない。そこで、英語が得意でないHTでもALTと協力して行えるような指導計画を作成したのである。

(2)　英語活動の目標

先に述べた経緯や課題を考えた上で、今年度の英語活動の目標を次のように定めた。

英語に興味をもって会話を楽しみながら コミュニケーション能力の基礎を養う

ここでいうコミュニケーション能力の基礎とは、子どもが英語の世界に自然に入ってコミュニケーションに必要な会話能力や態度などを自ら身に付けていくことである。これを英語活動における学びという面で見ると、「無理なく楽しく英語の世界に入っていこうとすること」ということができる。これは、今後の学習にもつながる大きな資質・能力である。

私達は、子どもが英語に慣れ親しみ、会話を中心とする活動自体を楽しみ、その活動に進んで参加しようとすることを願っている。そのような活動をする中で子どもが自然な形で英語に興味を持ち、コミュニケーションを積極的に楽しもうとする態度を育むと同時に言葉や文化についても関心をもつようになってほしいと考えている。

3　活動にあたって

(1)　めざす子どもの姿

今年度私達は、めざす子どもの姿を次のようにとらえて英語活動に臨んでいる。

英語に親しみを感じて 　活動に進んで参加しようとする姿

「英語に親しみを感じる」とは、英語に興味をもって慣れ親しむこととととらえる。英語の歌を身ぶりを入れながら歌う、楽しいゲームの仕方を知ってそのゲームをするために必要な英語を使うなどのことである。

子どもは、英語をシャワーのように浴びる。どんどん忘れてもかまわない。その中でたとえ一つか二つであっても、自分にとって興味のある言葉や言い回しが心に残っていて、自分が使える英語となれば幸いとしたい。例えば、生き物の大好きな子どもが、“tadpole”や“stag beetle”という言葉をいつの間にか知っていたり、活動のたびにくり返す“How are you?”“I'm fine thank you, and you？““I'm fine too, thank you.”が自然に口をついて出てくることを期待したい。このような活動であれば、子どもは英語を言語学習の対象としてだけでなく、自分の思いを相手に伝える手段の一つとしてとらえることができる。そしてそのことを生かした場面や状況の設定をしたり、あるいはゲームやクイズなどの楽しい場面を設定したりすれば、子どもは活動に進んで参加しようとするだろう。このような姿を、めざす子どもの姿とする。

(2)　めざす子どもの姿にせまるために

①　聞くこと、話すことへの自発的な働きかけを促す

「英語は面白い、楽しい」と子どもに感じてほしい。興味・関心を引き出し、もっと聞きたい、もっと話したいと感じさせるような楽しい活動づくりを心がけたい。そのためには、子どもの実態を的確に把握して、子どもにとって身近で無理のないテーマを設定し、自分のことを表現できるようにすることが大切である。そうすれば子どもは英語に抵抗なく自発的に取り組むことができる。

また、ゲーム的な活動についても、英語の得意な子に有利なものではなく、どの子にも同じチャンスがあるようなゲームを工夫することで子どもの自発性を促したい。

②　「ひと」とのふれあいを大切にする

コミュニケーションの相手は、言うまでもなく「ひと」である。子どもが英語活動でかかわる「ひと」は、ALTであり、HTであり、クラスの友だちである。

ALTにはこれまで同様、一人一人と挨拶をする、握手をする、頻繁に言葉をかけるなど積極的に子どもとかかわる場を設けていきたい。

HTは、子ども一人一人の実態や個性を一番よく知っているので、一人一人への支援や働きかけをできるだけ多くしていきたい。

さらに、ALTやHTから示された英語を友だちと言い合ったり聞き合ったりする場面を多く設定し、子ども同士がかかわる場を大切にしたい。そのことが英語に対する自信を深めることにつながると考える。

③　「無理なく楽しく」を活動の基本にする

子どもはnative speaker の英語をシャワーを浴びるように聞く。もちろん、ALTの英語のすべてが分かるわけではないが、話の内容は、ALTの身ぶり、動作、表情で何となく理解できる。この「何となく分かる」という感覚を大切にしたい。すべてを完璧に理解することを求めるのでなく、何となく分かることが「無理なく楽しく」するために大切である。

さらに、「くりかえす」ことも大切である。同じ表現が何度となく登場する。忘れてもこの後何度でもその表現に出会うことができる。自分のことを相手に伝えるために必要なら、いつか自然に使うことができるようになるだろう。同じ言葉や表現にくり返し出会うことで、英語が「無理なく楽しく」子どもの中に入っていくと思われる。

④　自己評価活動で子ども自身のよさの自覚を促す

私達が大切にしたいのは、子どもがコミュニケーションをいかに積極的に楽しもうとしたかという態度や意欲面での自己評価である。

昨年同様、活動の最後にその活動のふりかえりをしていく。ふりかえりは、自由記述のほかにアンケート形式のもの、ワークシート式のものなど、内容や学年に応じた形で工夫したい。

また、そのふりかえりが後の活動に役立つように、教師が十分な検討を加えて子どもに返していきたい。例えば、学期の終わりの時間にそれまでに出会った表現をまとめて使うなど、ある程度の期間をおいて残ったものを確かめる方法や、新しいテーマで学習に取り組む際に、これまでに得た英語表現に一つだけ新しく加えてみる方法などである。そうすることで、英語活動の積み重ねを意識するとともに、自分の学びのよさを自覚し、自信をもって次の活動に臨むことができるようにしていきたいと考える。

実践例　－４年－

(1) テーマ　あなたはピアノがひけますか？

(2) ねらい

・いろいろな動作を示す言い方を知る。
・“Can you play the piano?” “Yes, I can./No, I can't.” の表現を使う。
・動作ができるかどうかを尋ね、答える活動を、ゲームや歌などを通して楽しむことができる。

(3) 指導にあたって

テーマ設定について

本テーマでは、日常生活の会話の中でも使われることが多い動作を示す言い方を知ることが主な活動となる。それらをcanと組み合わせることにより、自分の持つ英語表現の中に取り入れて、新たなコミュニケーションを生み出していくことがねらいである。

これまでの英語活動において動物や食べ物、スポーツなどの名詞はすでに取り扱っているが、動詞については、初めてと言ってよい。本テーマで多くの動詞について知ることは、今後、自分のしたいことやできることを伝えることができるようになったり、英語の指示を聞き取ることができるようになったりして、より自分を表現することにつながるであろう。

めざす子どもの姿に迫るために

① 聞くこと、話すことへの自発的な働きかけを促す

表現を繰り返し練習する際には、チャンツを入れたり、視覚に訴えた絵を描いたり大きなジェスチャーをALTやHTがしたりして雰囲気を盛り上げる。さらに、ALTの話すことをしっかりと聞きとるようにするために「Freeze！ゲーム」を導入し、楽しみながら活動できる場を設定した。また、「Guess What?ゲーム」ではカードを一枚でも多く集めるという活動を通して、積極的に英語表現を楽しむ場をもち、楽しい雰囲気の中で子ども一人一人が進んで英語を使うことができるようにする。

テーマに直接関わりのある歌「We Can Be Together」を授業の最後の方に取り入れることで自然と"We can～"の表現が身につくようにしたい。英語表現を考えて話すのではなく、リズムに乗って音声表現することで、自然と覚えていけるようにする。

② 「ひと」とのふれあいを大切にする

英語での表現を数多く体験するため、表現の練習過程では、ALTとのマン・ツー・マンの会話をする場面を多く取り入れ、ALTとできるだけ多くかかわることができるようにしたい。HTは、子ども達が安心してALTとかかわったり、表現活動ができるようにしたりと子ども一人一人の実態にあわせてサポートしたい。また、「Guess What?ゲーム」では、ALTやHTとの応答だけでなく、子ども同士でゲームを進めていくなどして自然な関わりの中で英語表現が生きるようにしていきたい。

③ 「無理なく楽しく」を活動の基本にする

子どもたちには英語活動の時間は、できるだけ多くの英語を耳にしてほしいし、わからなくても相手のジェスチャーや表情などから伝えようとする事柄をとらえてほしいと考えている。必要ならHTが日本語で説明を加えるが、子どもたちには英語をしっかり聞きとろうとする態度を身につけてほしいと考えている。

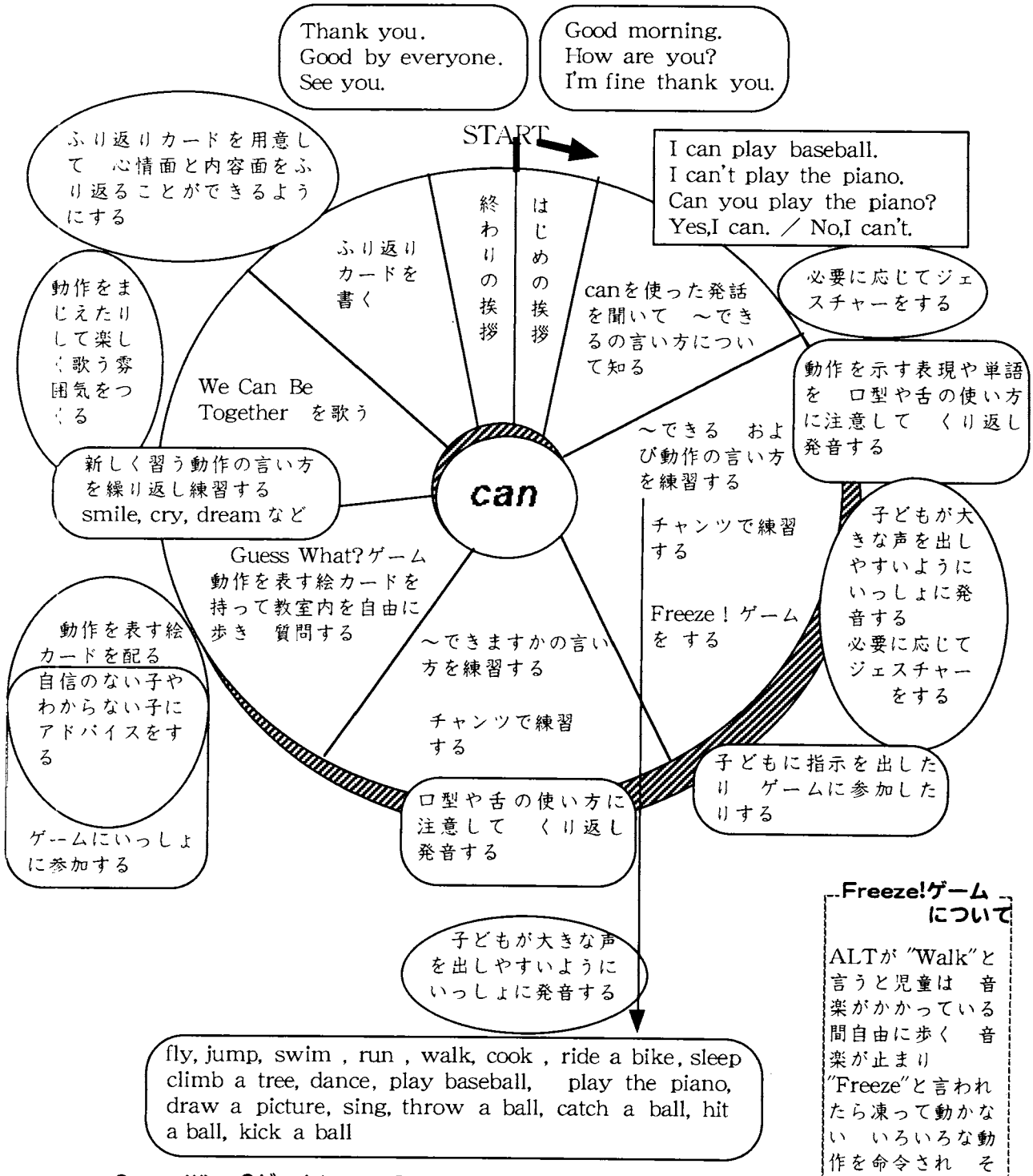
まず、ＨＴとALTによる楽しい会話によるテーマの導入によって、今日はどんなことを習うのかを概ね予想し、見通しを持って活動に入ることができると考える。そこで得た見通しと会話の楽しさが、新しい表現も積極的に聞いたり話したりしていこうとする気持ちにつながるものと考える。さらに、チャンツやテーマに関わりのある歌「We Can Be Together」、そして、2つのゲームを取り入れて練習することによって、楽しみながら数多く英語表現を使うことができるようにしたい。いつの間にか英語のリズムが「何となく分かる」ようになっていればと考える。

④ 自己評価活動で子ども自身のよさの自覚を促す

授業の後半に「Guess What?ゲーム」をすることによって、この時間に新しく知った英語表現が使えるようになったことを自覚し、英語活動への自信につなげていきたい。また、毎時間にふりかえりカードを書いているが、本時でも、その時間に学習したことやできるようになったこと、その時の心境や気持ちの変化等、内容と心情面の両面をふり返ることができるようなカードを用意して、子どもに記述させたい。

そのふりかえりカードを利用して、学期末や学年末にそれまでの活動をふり返る場を設けて、英語活動への態度や意欲面の変化を確認することができると考える。

(4) 本時の活動



Freeze!ゲームについて

ALTが"Walk"と言うと児童は　音楽がかかっている間自由に歩く　音楽が止まり"Freeze"と言われたら凍って動かない　いろいろな動作を命令され　それについて催眠術にかかったように動く

Guess What?ゲームについて

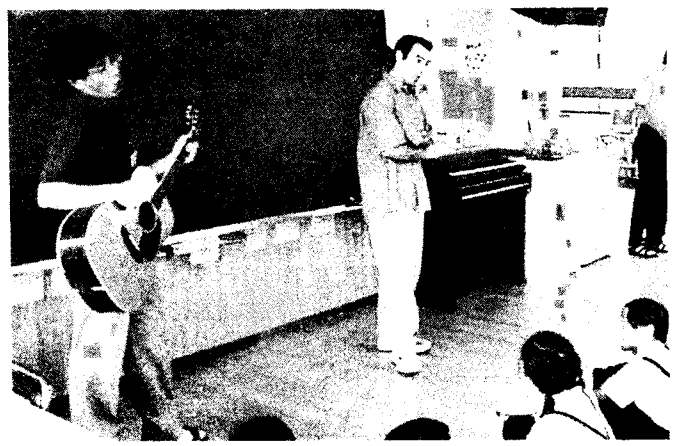
児童は　動作を表す絵カードを持って、教室内を自由に歩く　友達どうし出会ったらジャンケンをする　そして勝った方が　先攻　Can you jump? のように聞く　相手の児童は　自分の持っているカードがjumpのカードなら動作をしながら　Yes, I can.　他のカードなら　No, I can't.　と答える　どちらかが　Yes, I can.と答えるまで　お互いに質問をくり返す　Yesの場合相手にカードを渡す　渡した人はHTに新しくカードをもらう　くり返し行う

(5) 本テーマにおける授業の実際と考察

今年度は、英語活動領域においてめざす子どもの姿に迫るために４つの手立てを考え研究を進めてきた。また、昨年度と違い半年間同じALTと授業を進めることができるようになった。４つの手立ての実際やその有効性、ALTとのTTのあり方について考察を進めていきたい。

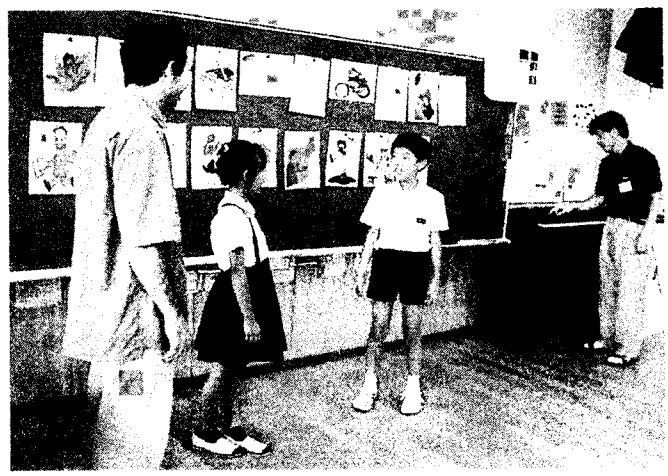
❶ 聞くこと、話すことへの自発的な働きかけを促す

導入は、驚きをもたせ子どもの関心をひきつけるようなものをと考えた。ＨＴがギターを持ち“I can play the guitar. I can sing a song very well.”と言って得意気にギターを弾いて歌った。その後ALTに”Can you play the guitar ?”と尋ね“No, I can't.”とALTは答える。この二人の会話や表情、動作を見ながら、子どもはすぐに今日勉強することを理解することができたようだ。また、二人の楽しそうなやり取りを見て自分達も話してみたいという気持ちになったことがわかった。



ＨＴとALTの会話でスタート

テーマに関連する表現をくり返し練習する際には、絵を用意して視覚に訴えたり、HTやALTが大きなジェスチャーや表情などをしたりして話している言葉の意味が楽しく理解できるようにした。その結果、子どもは楽しい雰囲気につつまれALTの発音やイントネーションをしっかり聞こうとし、絵や動作から言葉の意味を理解しようとしていた。また、チャンツではリズムに乗って大きな声で発音することができた。ALT→子どものパターンだけでなく、グループ→グループ、個→個へとパターンを変えたことは、子どもの新鮮な気持ちを持続させるには有効な手段であった。



二人でチャンツに挑戦

ゲームを取り入れることも、子どもが楽しく活動できる要因になった。一つは「Freeze！ゲーム」である。ALTの指示によって動作をしたり、止めたりするのだが、子どもはALTの話すことに真剣に耳を傾け、飛ぶ、蹴る、ダンス、自転車に乗るなどのジェスチャーをした。このゲームは、聞くことに重点を置いたものだが、動き回ることによって緊張がほぐれ、この後の活動を円滑にしてくれる役目も果たした。もう一つの「Guess What?ゲーム」は、子どもは一枚でも多くカードがほしいので、積極的に友達やALTに話しかけていく姿が見られた。中には英語での表現の仕方を忘れている子もいたが、相手の子やHTやALTに聞きながら、楽しくゲームに参加していた。英語の得意な子も、そうでない子もカードをもらうチャンスは同じなので、全員が最後まで楽しめていた。

Freeze!ゲーム

最後に「We Can Be Together」という曲を歌った。本時では歌詞の意味を知り、２度ほど繰り返して聴いただけだった。けれども、毎朝聴くことによってやがて自信をもって歌えるようになった。音楽を媒介にするとリズムよく英語を話すことができるので、聞くこと話すことへの自発的な働きかけを促す効果的な方法の一つとなった。

❷ 「ひと」とのふれあいを大切にする

ALTは、常に明るく子どもに接してくれる。発音練習をしている時は、口形を真似するように子どもに働きかけ、ほめ言葉をまぜながら繰り返し練習させた。子どもに指示を出すときはできるだけ簡単な英語を使い話しかけてくれ、子どもも何とか聞き取ろうする様子が見られた。また、ゲームでは子どもの中に入って会話を楽しみながら、言葉に詰まる子には助言して、ふれあいを大切にしながら活動を支援した。

HTは、子どもが発音練習やゲームのときなど、自信なさそうにしているときには横に行って声かけをした。いっしょに発音したりアドバイスしたり、さらにほめ言葉を与えたりすることで、子どもは安心感をもっていたようだ。また、ALTと同様、子どもの前にたったときの様子一つで、子どもの授業への取り組む姿勢が違ってくるので、常に授業が楽しくなるような雰囲気づくりを心がけた。

「Guess What?ゲーム」では、子ども同士の関わりを意識したゲーム展開にした。わかっている子は、よくわからない子に対して教えてあげるような様子が見られ、ますます自信を深めることができた。会話が不確かな子も友達との会話を重ねていくことにより、徐々に自分のものにしていく様子が見られた。子ども同士で会話することによって、自分の言葉がいろいろな相手に伝わる喜びを感じていたようだ。

子どもによりそうALT

雰囲気づくりを考えて

❸ 「無理なく楽しく」を活動の基本にする

Guess What?ゲーム

本時は、HTとALTの楽しそうな会話から始まったが、子どもは先生達が何を話しているのかそして、その時にどんな表情をし、身ぶりをしているのかを楽しみながらも真剣に見入っていた。最初からわかっていた子は数人だったかもしれないが、徐々にcanやcan'tの意味を分かってくる子が増えてきた。そして、その意味を尋ねたところ「できる。できない。」という意味だということを一人の子が答え、全員の頭の中に確かなものとして入っていった。楽しく子どもの興味をひきつけるような導入を心がけてみたが、その後の活動を積極的に取り組んでいこうとする気持ちにさせることができたようだ。

テーマとなった言い方をチャンツでリズムに乗せて発音したり、ゲームの中にその表現を取り入れたり、テーマに関連した歌を歌ったりなど、くり返しくり返し形態を変えながら子どもが意欲的に取り組めるように活動を工夫した。初めはわからなかった表現の仕方も、くり返していく中でいつの間にか子どもにとって身近なものになっていったことがわかる。ゲームの時にもどう言っていいのか困っている様子も数多く見られたが、会話の相手からアドバイスをもらうことで確かなものにしていく姿があった。チャンツやゲーム、英語の歌を歌うなどのような活動を行っていくことで、英語が「無理なく楽しく」子どもの中に入っていったといえる。

❹ 自己評価活動で子ども自身のよさの自覚を促す

授業後半の「Guess What?ゲーム」をすることによって、本時で学習したことを一人一人がふ

り返るきっかけとなる場面を意図的に設けた。子どものふりかえりの中にもゲームの中での記述が多く、後半にゲームをすることの有効性を感じた。ふりかえりは右のようなものでＨＴからの質問に対する回答の結果をのせておいた。このうち「canを使ってたずねたり答えたりすることができましたか」「進んで友だちや先生と会話をすることができましたか」の項目に対して答えが分かれたので、それをもとにふりかえりをまとめてみた（表１）。

Ｂ児は、意欲的に活動に参加し満足感を得ていることがわかる。しかし、その中にも難しかった点をあげており、１時間の自分の心境の変化をしっかりふり返ることができている。Ｈ児は、ゲームに入る時に表現の仕方やゲーム中の会話の仕方に不安を抱えていたのであろう。しかし、その不安も友だちとの会話を続けていく中で段々と解消していき、楽しくゲームに参加できたことが読みとれる。その意味でも、数多く会話をする場面を与えることの重要性を感じた。Ｏ児は、進んで会話をすることができなかったと△をつけていた。少々自信がなかったことが伺える。しかし、活動自体は楽しく感じていて、次の時間への意欲を表していた。この時間にもった前向きな気持ちを今後の英語活動に生かし、進んで英語を話してみようとする姿につなげていきたい。

英語活動　　月　　日

Name

今日の活動について答えましょう！！

よくできた◎　だいたいできた○　あまりできなかった△

(1)楽しく活動することができましたか？	◎　３２ ○　１
(2)canを使ってたずねたり答えたりすることができましたか？	◎　１７ ○　１６
(3)進んで友達や先生と会話をすることができましたか？	◎　１８ ○　１２ △　３

今日をふり返って

（できたこと、分かったこと、むずかしかったこと感想など）

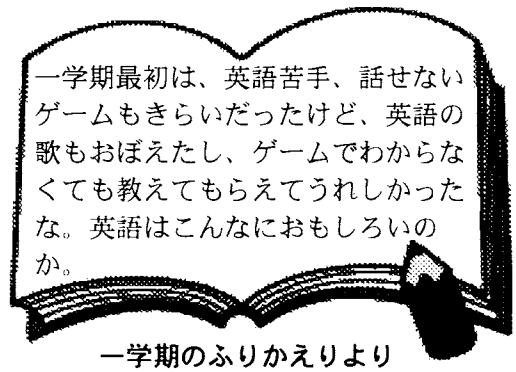
	楽しく活動	canを使って	進んで会話	今日をふり返って
Ｂ児	◎	◎	◎	canを使って会話をしてできるとできないの勉強をしました。むずかしかったところは、「できません」ですけれどゲームでやっていたらすぐにおぼえてうまくできるようになりました。
Ｈ児	◎	○	○	canを上手に使えてよかった。ゲームも少しむずかしかったけれども、だんだんと上手になった。
Ｏ児	◎	○	△	今日の欠点は、進んでやってみたり、先生と話すことができなかったところ。でも友だちとは仲良くできました。次は進んで話せる英語活動にしたいです

表１　子どものふりかえりより

❺　よりよいTTのあり方をめざして

今年度は、半年間同じALTとＴＴを行っている。そうすることで、前時と本時との授業のつながりを両者が確認しながら活動案を検討することができるようになった。活動案はＨＴが中心になって原案をたてているが、ALTからの適切なアドバイスもうけることができ、短い打ち合わせの時間を有効に活用することができるようになった。

また、打ち合わせや授業に、HTとALTのコミュニケーションが段々ととれるようになってきた。そのため、二人の授業での役割が決まりつつある。今回の授業でも、ＨＴは活動の進行につとめ、活動ごとの説明や発音練習はＡＬＴが担当した。さらに、日本語はALTもＨＴも極力話さない、表情豊かにはっきりと大きな声で話す、デモンストレーションの場面では二人のかけ合いを大切にしながら楽しい雰囲気にするなど、授業に臨む上での留意点を二人で共通理解しながら、取り組めるようになりつつある。



一学期のふりかえりより

子ども達は、楽しい授業をしてくれるALTに親しみを感じている。そして、このことが英語活動を好きになる子が増えた要因の一つにもなっている。今後もよりよいＴＴのあり方を探りながら、英語に親しみを感じる子どもを増やしていきたい。

3　実践例　－3年－

(1)　テーマ　色を表す言葉を読んでみよう

(2)　ねらい

・文字を読むことに関心を持つことができる。
・色を表す言葉の文字を読んだり、ゲームの中で文字を意識しながら会話を楽しむことができる。

(3)　指導にあたって

テーマ設定について

これまで子どもは、ALTの発音を聞き、正しい発音を真似するという形で英語の言葉を発音してきている。したがって、子どもが文字を意識しながら発音したり、会話をしたりするということはあまりない。これは、native speakerの英語をできるだけ多く子どもに「浴びせる」ようにしたいという願いからである。

しかし、このことは、英語活動において文字の学習を軽視しようとするものではない。最近では街を歩けば、英語で表現された店や商品の看板や広告文などが目につく。知らず知らずのうちに子どもはそうした英語の文字を見ているのである。中には、「何て読むのかな？」あるいは「読めたらいいな」と感じている子どももいる。そうした願いを大切にするとともに、文字を「コミュニケーション能力の基礎」を養うための一つの手段として位置づけ、文字に関心を持つことが「読みたい」、読んだことを生かして「話したい」とつながるようにしたい。そこで、子どもにとって「無理なく楽しく」取り組めるような形での文字を読む活動を展開したいと考えている。

めざす子どもの姿に迫るために

①　読むこと、聞くこと、話すことへの自発的な働きかけを促す

英語を文字で読むことに抵抗を感じる子どももいることから、まず街でよく見かける英語で表現された店の看板や商品などの写真を提示し、知っていることを出し合うことで、読むことの楽しさや他の言葉も文字で読んでみたいと感じることができるようにしたい。

また、文字を読むことを生かしてゲームをしたり、ワークシートを使って文字探しをしたりすることで、文字を意識できるようにしたい。その際には、単に文字を１つずつ読むのではなく、言葉としてのまとまりを重視し、繰り返し発音練習をする場を設けるようにしたい。

②　「ひと」とのふれあいを大切にする

発音の練習場面では、ALTがテンポよく子どもに色を表す言葉の発音を促していく。文字の並べ替えがうまくいったかどうか、あるいは日本にある英語表現の看板を知っているかどうかをALTに尋ねるような場面も取り入れ、ALTとできるだけ多くかかわることができるようにしたい。その際にHTは、子どもの様子を観察しながら適切な言葉をアドバイスしたり、相手の表情を見ながら話すことの大切さを伝えたりしていきたい。

また、文字カードを使ったゲームでは、子ども同士が会話を通してかかわり合いながら、楽しく交流できるように、自信のなさそうな子どもに声をかけたり、ゲームに参加して雰囲気を盛り上げたりしたいと考えている。

③　「無理なく楽しく」を活動の基本にする

文字を読むことを主眼に置いた学習は初めてなので、これまで何度か取り扱った「色」を題材にすることで、無理なく取り組めるようにしたいと考える。また、文字の並べ替えでは、子どもの実態に応じてヒントを出すようにしたい。また、色文字カードを使ったゲームでは、色と文字が対応した掲示をたよりにできるよう配慮したい。

色文字カードを使ったゲームでは、手持ちのカードが減っていくことで、ゴールに近づいていく楽しさを感じることができるようにする。

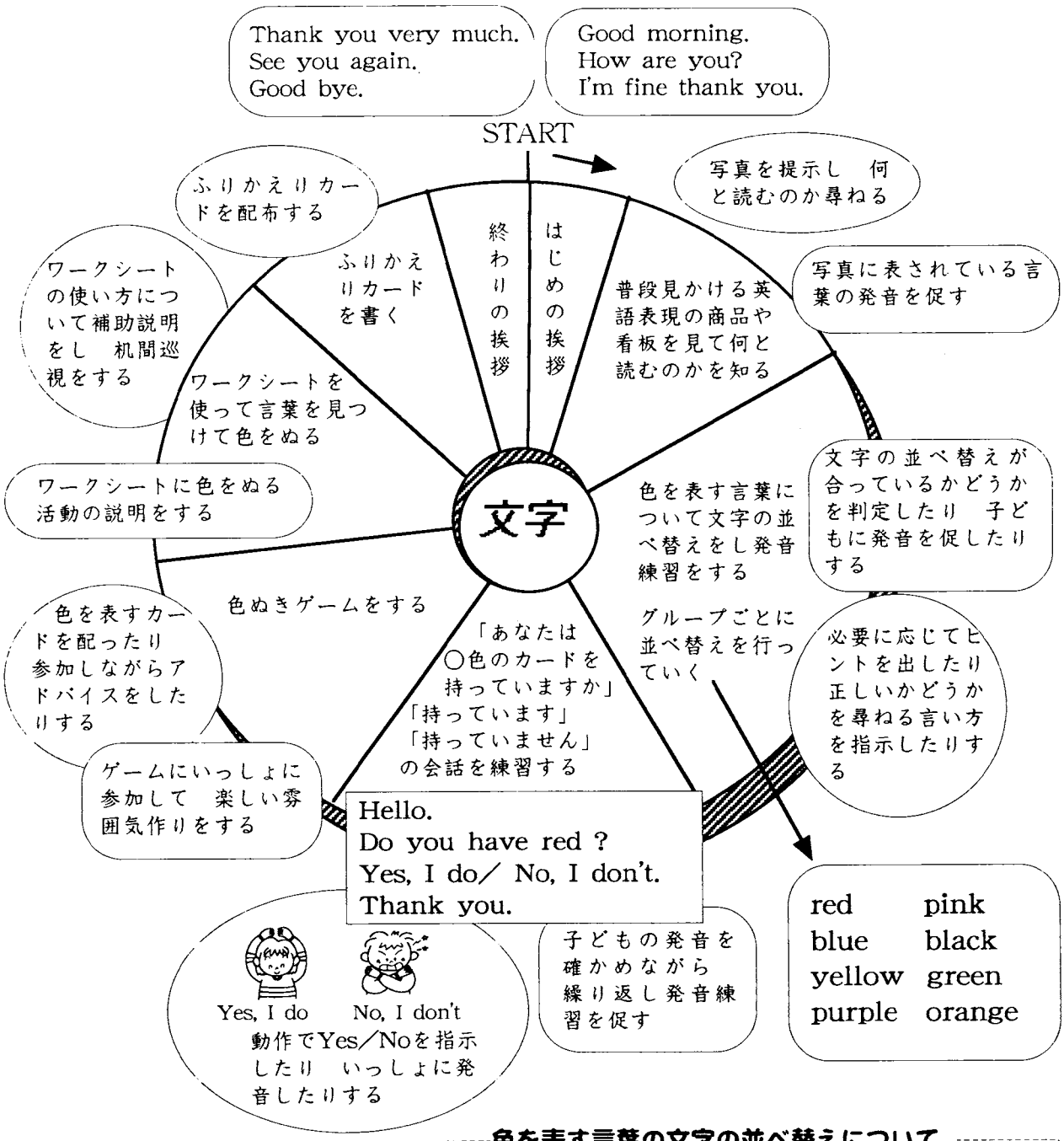
この学習を通して、無理なく楽しく文字を読むことができたということが、子どもの文字に対する自信につながり、「もっと英語を読めるようになりたい」という意欲につながっていくものと考える。

④　自己評価活動で子ども自身のよさの自覚を促す

自分が文字を読んで色をぬったワークシートを見ながら、ふりかえりを書く活動を設けたい。その際には、学習したことやできるようになったことやそのときの気持ちなど、内容と心情面の両面からふり返ることができるようなカードを用意する。教師は「色の言葉を読めるようになったよ」「もっと他の言葉も読めるようになりたい」などといった子どものふりかえりの記述を「よさの自覚」としてとらえ、クラス全体にも広げるようにしたいと考える。

また、今後の文字学習のふりかえりも含めて、学期末や学年末にそれまでの活動をふり返る場を設けて、文字学習に取り組んできた自分の心情面、内容面での変容を自覚できるようにしたいと考えている。

(4) 本時の活動



色を表す言葉の文字の並べ替えについて

- ばらばらに渡された色を表す単語の文字を　言葉に合うように黒板に並べる
- 並べたらALTに合っているかどうかをたずねる
- 合っていたら次のグループと交替する

色ぬきゲームについて

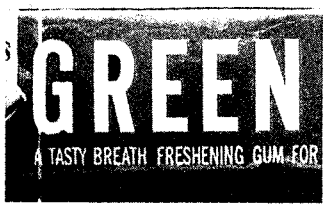
- 子どもは色を表す文字が書かれたカードを８枚もち　相手を見つけてじゃんけんをする
- 勝った子が“Do you have red ?”のようにたずねる
  たずねられた子は　持っている場合は“Yes, I do.”と答えカードをわたす
  持っていない場合は　“No, I don't.”と答え　受け渡しはない
- 同じカードがそろったら「ばばぬき」のように２枚そろえて箱に入れる
  じゃんけんに勝った子も負けた子もカードは減っていく
- 最後に一番カードが少なかった子の勝ちとなる

(5) 本テーマにおける授業の実際と考察

これまで子どもが文字を意識しながら発音したり、会話をしたりするということはほとんどなく、文字をテーマにして活動をするのは今回が初めてといってよい。文字を「コミュニケーション能力の基礎」を養うための一つの手段として位置づけ、文字に関心を持つことが「読みたい」読んだことを生かして「話したい」とつながるようにしたいと考えた。もちろん、文字に抵抗を感じる子どももいると思われるので、子どもにとって「無理なく楽しく」取り組めるような形での文字を読む活動を展開したいと考えた。

そこで、「めざす子どもの姿にせまるために」設定した４つの観点をもとに授業の実際をふり返り、考察をしていくことにする。

❶ 読むこと、聞くこと、話すことへの自発的な働きかけを促す



グリーン

イエロー

導入段階において、本時の学習内容をつかむために、店や街で見かける色を表す文字が書かれたものの写真を提示した。チョコレートの“BLACK”、ガムの“GREEN”、カー用品店の“Yellow Hat”である。子どもは文字を見てすぐに「ブラック」「グリーン」「イエローハット」と読むことができた。これは、普段からよく見かける商品や看板なので既に読み方を知っていたことや、提示した写真に実際の色が写っていて既習したことを思い出すことができたことによるものと考える。いずれにしても、文字の提示に対して子どもは素早く「読む」反応を示した。そして、「今日は何の勉強をすると思う？」というＨＴの問いに対してもすぐに「カラー」と答えた。この様子から子どもの色を表す文字を読むことへの関心は高いと感じた。そして、ＡＬＴの発音に合わせながら意欲的に発音練習に取り組んだ。

その後、「色ぬきゲーム」という活動に取り組んだ。これは、一人一人が色を表す言葉の文字を書いたカードを８種類持ち、相手を見つけて会話をし、カードのやり取りをしてカードを減らしていくゲームである。カードは全て白画用紙に印刷されたものであり、何色かを判断するには文字をたよりにする他に方法はない。また、自分のほしいカードや相手に渡さなければならないカードを見つけるために文字を読まなければならない。つまり、文字を意識して読まなければならない状態に子どもを追い込んでいくというのがこのゲームのねらいである（本時の活動：色ぬきゲームについて参照）。抵抗のある子どものために、色とそれを表す文字が対応した掲示を見ることができるようにしておいた。

ゲームが始まると、どの子も意欲的に活動に参加していた。相手がどのカードを欲しがっているのかをしっかりと聞き取ろうとしたり、自分の手元にそのカードがあるのかを一生懸命に探したりする姿が見られた。普段から友だちになかなか積極的に声をかけられないでいる子も、自分のカードの文字を確かめるようにしながら、楽しそうに友だちや先生と会話をしていた。

❷ 「ひと」とのふれあいを大切にする

子どもが英語活動でかかわる「ひと」は、ＡＬＴ、友だち、ＨＴである。それぞれが互いにかかわる場面を多く取り入れることにしたいと考えた。

子どもの会話にアドバイスをするＡＬＴ

ＡＬＴは活動の基本的な進行において子どもとかかわっていった。子どもはまずＡＬＴの表情豊かなあいさつを通して、活動の始まりを楽しく迎えることができた。本時のキーワードである色を表す言葉が出てきたときには発音を促し、子どもはＡＬＴの口の動きを真似しながら、繰り返しリズムよく練習することができた。また、ゲームにおいては、積極的に子どもと

交わって会話をリードしたり、言葉に詰まる子にアドバイスをしたりすることで、子どもとふれあいながら活動を支援した。

ＨＴは、ＡＬＴの進行状況と子どもの実態を観察しながら、必要に応じて子どもにかかわっていった。ＡＬＴの説明を言葉や身振りで補足したり、ゲームの中で言葉に詰まった子にアドバイスをしたりすることで安心感を持たせることができた。また、ともに活動を楽しみながらほめ励ましたりすることによって、子どもはできた喜びを感じ、さらに意欲的に活動することができたのではないかと考える。

子どもとともにゲームに参加するＨＴ

また、子ども同士がかかわり合う場面を大切にしたいと考えた。文字の並べ替えの活動においては、グループごとに取り組むことで、文字に対する不安を軽くするようにした。短い時間ではあるが、子どもは相談をしながら並べ替えを行い、できたときには互いに喜び合っていた。一対一で会話をする色ぬきゲームでは、相手を見つけて意欲的に聞き合ったり、カードの受け渡しをしたりしながら、友だちと英語で会話をすることができた喜びを表現する姿が見られた。

子ども同士で会話を楽しむ様子

❸　「無理なく楽しく」を活動の基本にする

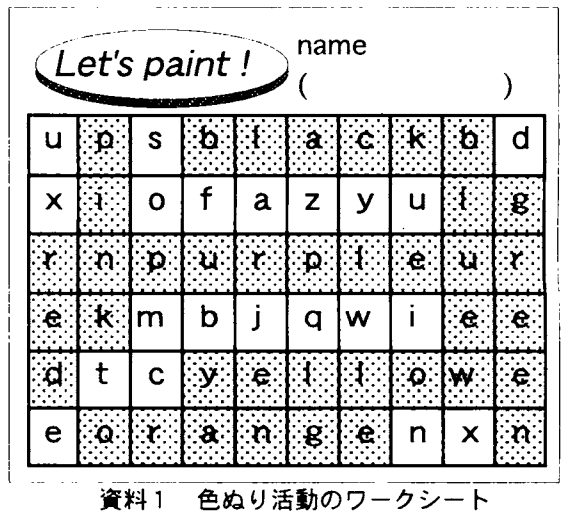
文字に関心を持ったり、文字を意識しながら読むということについて、「無理なく楽しく」活動することができたかどうかについて考察を進めていきたい。

まず、文字の並べ替え活動については、できそうかどうかを子どもに尋ねながら進めていった。８つの単語のうち、redやpinkについては文字数が少ないことから、正しく並べることができた。yellowやpurpleについては、文字数が多いせいか自信が持てないようだったので、最初と最後の文字を示した上で取り組ませた。この活動は、正しく並べることよりも言葉が文字の並びによって成り立っていることを意識することを目的にしたものである。したがって、ＨＴとＡＬＴは正しかったかどうかを特に問題にせず、文字が並んでできた言葉の発音を練習する活動へとつないだ。子どもは、自分たちがこれまで発音してきた言葉が文字で表されることをパズル感覚で楽しむことができた。

文字を並べ替える活動の様子

色ぬきゲームでは、はじめにＨＴとＡＬＴが進め方をデモンストレーションすることで、そのおもしろさを印象づけることができた。一部の子どもはすぐにでもゲームを始めたい様子であったが、ＡＬＴの発案で、２人の子どもがみんなの前で会話を練習する様子を通してゲームの流れを確認した。２人の少し言葉に詰まる様子から、再度練習が必要かどうかについて迷ったが、早くゲームを始めたいという意欲に押されてスタートした。最初は少し戸惑っている子もいたが、声をかけられてうれしそうに会話をしたり、カードのやり取りを進めたりする様子が見られた。

次に、学習のまとめとして、文字の色ぬり活動を行った。これは最後にもう一度文字を意識する場面を設けたいと考えたからである。ワークシートにならんでいる文字群の中から、本時で扱った単語の文

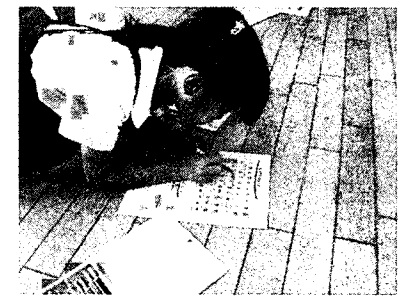


Let's paint !　name (　　)

u	p	s	b	l	a	c	k	b	d
x	i	o	f	a	z	y	u	l	g
r	n	p	u	r	p	l	e	u	r
e	k	m	b	j	q	w	i	e	e
d	t	c	y	e	l	l	o	w	e
e	o	r	a	n	g	e	n	x	n

資料１　色ぬり活動のワークシート

字の配列を見つけ出し、それぞれの色をぬるという活動である（資料１参照）。パズル感覚で「無理なく楽しく」取り組める活動であり、子どもは意欲的に文字を探し、見つけることができたときには熱心に色をぬっていた。その結果を見ると、全ての子が、概ねうまくぬることができていた。



色ぬり活動を楽しむ様子

❹ 自己評価活動で子ども自身のよさの自覚を促す

授業の終わりに、自己評価活動としてのふりかえりを一人一人が書いている。ＨＴからの質問に対する回答の結果は資料２の通りである。このうち、「色の言葉を字で読むことができたか」という問いに対して、答えが分かれた。それをもとに、３人のふりかえりをまとめてみた（資料３参照）。

英語活動のふりかえり　月　日　3年　組（　　）

しつもん	言葉で書きましょう
今日の英語活動は楽しかったですか	楽しかった・・・・・・30人 ふつうだった・・・・・・2人
色の言葉を字で読むことができましたか	できた・・・・・・・・27人 少しわからなかった・・・1人 できなかった・・・・・・4人
ほかの言葉も字で読んでみたいですか	はい・・・・・・・・・・29人 いいえ・・・・・・・・・・3人
そのほかのかんそうを書きましょう	

資料２　ふりかえりの結果

Ｕ児は、文字を読むことを通して英語活動に意欲的に取り組むことができ、満足感を味わうことができたことが伺える。Ｈ児は、むずかしいと感じながらも、文字を読むことに関して前向きにとえようとしていることが伝わってくる。Ｓ児は、文字をうまく読めなかったという気持ちがかなり強かったようだ。色ぬきゲームで残った手持ちのカードを片づける際に、その文字が書かれた箱になかなかカードを入れることができずに戸惑っている姿が見られた。ただ、Ｓ児は活動そのものは楽しんでいたし、文字の色ぬりは全てうまくできていたので、そのがんばりを認め自信を回復できるように励ましていきたい。

なお、今回は初めての文字学習ということもあり、継続的な自己評価によるよさの自覚という点では不十分であるため、今後さらに文字学習に対する自己評価活動を積み重ねていきたい。

	文字で読むことができたか	今日の活動は楽しかったか	他の言葉も読みたいか	その他の感想
Ｕ児	字がほとんど読めた	いろんな先生と話して楽しかった	どんどんちがう言葉も読みたい	今日はゲームで先生や友だちとえがおで活動できてうれしかったです
Ｈ児	少しわからなかったです	楽しかったです	はい	少しむずかしかったです　言葉で読むのは少しにがてだということがわかりました　けれど楽しい気がしました
Ｓ児	いいえ	はい	いいえ	字があまり読めなかった

資料３　３人の子どものふりかえりの内容

❺ テーマをふり返って

色を表す言葉の文字を読むということに関して「無理なく楽しく」活動を展開したいという考えで取り組んできた。そのねらいは概ね達成できたものと考えている。それは、活動中の多くの子どものうれしそうな表情や、読むことを生かして友だちや先生と会話を楽しむことができたという自己評価の内容から伺うことができる。

今回のテーマが第３学年という発達段階において適当であるかどうかについては、議論の余地があろう。ただ、今や文字で表された英語の言葉は、本やテレビ、商品や看板などに使われるようになり、子どもにとって身近なものになりつつあるのは確かである。今回の実践を通して文字もまた「コミュニケーション能力の基礎」を養う上で大切な手段であることを感じることができた。もちろん「書くこと」をねらった文字の修得をめざしているのではなく、あくまでも「聞くこと」「話すこと」と密接にかかわり合った「読むこと」という意味での活動を念頭に置いている。カリキュラムにおける順序性に検討を加え、子どもが親しみを持てるテーマで会話を楽しむことができるような文字学習を今後も取り入れていきたいと考える。